

四国遍路と修験

——『四国作家』の会代表 市原信夫

【宗教と風土】

宗教は風土を反映するといわれる。

砂漠の中では、自然は暖かく人間を包んでくれるものではなく、厳しい。天にあって、部族を結束するものとしての絶対神がもとめられるようになるのも不思議ではない。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教といった世界宗教は、いずれも砂漠というものを生活環境にして起こった宗教である。

【日本仏教】

自然との一体感が日本の宗教にはある。仏教はインドに起こり、中国を経て、天台、密教、禅宗などの形で日本に伝わってきたが、いずれも、日本の土着信仰を吸収しながら、日本的に変質した日本仏教になった。

この変質に大きな影響を及ぼしているのが、自然であり、それを核にしたところの風土である。

【自然の聖化】

久保田展弘氏は「日本の聖地」（講談社文庫）の中で、「『南無阿弥陀仏』に帰ってゆく一遍。即身成仏の実践者となってゆく道元をはじめ、日本の仏教者が自己のオリジナリティーを打ち出す経緯をたどってゆこうとするとき、そこに必ず山岳・海・樹林・水の流れといった自然が、決定的な役割を果たしていることに気づく。日本の仏教者は、いわば自然というフィルターを通して、外来の宗教である仏教を内面化してきたのである。いや日本人にとって、仏教はこのフィルターを通さずに受け入れることはできなかつたのではないか」と、仏教が日本化されるに際しての「自然」の重要性を書いている。

【四国遍路の特徴】

四国遍路は、弘法大師の足跡をめぐって現世と来世の安楽を願う巡礼。西国、坂東、秩父の観音巡礼と違って、本尊は、観音様のほか、大日如来、阿弥陀仏、釈迦、薬師如来、地藏尊、不動尊など様々である。それに弘法大師信仰が加わっている。

四国遍路のもつ要素として、4つの特徴がある。

1. 浄行としての苦行
2. 滅罪・鎮魂
3. 自然崇拝
4. 遊行

【修験道—苦行による蘇り】

この4つの特徴のうち、①浄行としての苦行③自然崇拝の特徴をもっているのが「修験道」であるいえる。

- 修験の本質は、山林など自然を「聖なる空間」として聖化、そこで修行することで霊力を得ることにある。その験を人々に授けることから、「修験」と呼ばれる。
- 日常からの離脱—蘇りの構図
- 修験道の祖は、役行者（役小角）とされている。
- 広辞苑に、役行者について、

「奈良時代の山岳呪術者。修験道の祖。多分に伝説的な人物で、大和国葛城山に住んで仏教を修行、吉野金峰山、大峰などを開いたが、讒言によって伊豆に流されたという」書かれている。

日本史辞典でも、似たような説明がなされている。

【役行者—修験道の祖】

修験道の本尊は、蔵王権現で、吉野金峯山本堂（蔵王堂）に祀られている。蔵王権現は、役行者が吉野の金峯山で修行中に現われたとされている。

役行者の足跡は、全国各地の名山、古刹に残っており、四国遍路の寺にも、役行者が開基したとされる47番八坂寺がある。

石鎚山も修験の山で、60 番横峯寺、64 番前神寺は石鎚山の遥拝所であった。役行者が石鎚山を拝んでいると、蔵王権現が現われ、その像を刻んだのが寺の始まりという。

【修験の聖地】

- 修験の聖地は、大和、吉野、南紀にかけての峰々が知られている。
- 東北では出羽三山（羽黒山、湯殿山、月山）。出羽三山は32 代崇峻天皇の皇子、蜂子皇子（能除）が開山したという。
- 修験の集団は、全国各地の霊山にあり、加賀の白山、九州の英彦山、関東の御嶽山、四国の石鎚山、剣山などが有名である。

修験者は、室町時代、天台密教系が聖護院のもとに結集して本山派、真言系が醍醐寺三宝院のもとで、当山派と称するようになった。

【秋の峰入り】

- 山伏たちは武士や庶民を檀那として、安産や病気の祈禱を行った。
- 山伏が山で修行することを峰入りという。
- よく知られているのが、熊野の「奥駆け」と羽黒山の「秋の峰入り」
- 熊野奥駆けー移動型
- 羽黒山の秋の峰入りー拠点型
- 山伏修行は、寺社の関係者が行う場合が多いが、今では、普通の社会人が修行のときだけ山伏になっている。

【海の修験】

- 修験には、山林修行の「山の修験」だけでなく、「海の修験」があった。
- 海に囲まれた日本では、海洋信仰も強く、古来、海沿いの

険しい道を歩く「辺地修行」が行われてきた。

- 修行の地として知られていたのは、四国、伊豆大島、能登、熊野だが、全国各地の半島や島で、「海の修験」が行われていた。

【空海の修行】

- 室戸岬に空海が修行したとされる「御厨人窟（みくろど）」がある。
- この洞窟に籠って、空海は虚空蔵求聞持法の修行をした。空海の「三教指帰」にいう。

〈阿国大竜嶽にのぼり攀じ、土州室戸崎に勤念す。谷響きを惜しまず、明星来影す〉

空海は密教を学ぶため、804年、遣唐使として中国に行く。

【四国遍路の原点—海の修験】

- 平安時代の末期、後白河上皇が編纂したとされる今様集「梁塵秘抄」に、

〈我らが修行せしやうは 忍辱袈裟（にんにくけさ）を肩に掛け また笈（おい）を負ひ 衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地を常に踏む〉（巻2の301）

この辺地修行が、辺地—辺路—遍路となっていた。

五来重氏は、「遍路と修験」の中で、

「日本の海洋宗教は古代に栄えて、奈良時代の転換期から山岳仏教に吸収されていった」と書いている。

四国八十八か所の霊場も、海岸部から次第に山間部に移って行った。

【修行の行場から寺へ】

- 南北朝時代の「とはずがたり」に、足摺岬の描写がある。〈かの岬には堂一つあり。本尊は観音におはします。隔てもなく坊主もなし。ただ修行者、行きかかる人のみ集りて、上もな

く下もなし)

五来重氏は「遍路と修験」の中で、書いている。

〈私は遍路修行は厳しい窟籠りとともに、毎日岬の突端に立って海に向かって何百回もの五体投地と足踏みを、岩がへっこむまで行って懺悔滅罪したものと思う。――このように懺悔滅罪をくりかえしながら辺地をめぐる宗教は、仏教化することによって海岸に祀られた観音や山上の神仏のほうに向けられるようになり、そこに大きな社殿や伽藍が建立された。宗教のベクトルが反対方向に向かったのである〉

【民間仏教―修験道と「聖」の系譜】

仏教が日本に入ってきたとき、鎮護国家のための祈祷や学問研究を行う「都市仏教」と、人里離れた山や辺地で修行を行う「民間仏教」の二つの流れができた。

都市仏教の僧は公認の僧（官度僧）で、官僚であり、その数も制限された。民間仏教の僧は行者とか聖と呼ばれ、公認でない私度僧や特定の寺に属さない僧だった。こうした行者―聖の系列の中には、修験道の祖とされる役行者や、社会事業をした行基、重源、踊念仏の空也など仏教史上、重要な役割を果たした僧が多くいる。

四国遍路は、こうした「聖」によって広められた民間宗教の流れの中にある。江戸時代の貞享4年（1687）、「四国遍路道指南」を書いて、四国遍路を世に宣伝し、「四国遍路の中興の祖」といわれる真念（?―1691）は、「高野聖」だった。

【海の札所、山の札所】

四国遍路の霊場が、祈願の寺であると同時に行者の修行の地であったことは、奥の院などに行けば分るが、結願の寺、88番大窪寺はそうした「山岳修験」の寺の一つ。

大窪寺について、江戸時代の元禄元年（1688）に書かれた寂本の「四国遍礼霊場記」に、

「此の寺は行基菩薩ひらき玉ふと也。其の後、大師興起して密教弘通の道場となし給へり」と書かれている。行基開基、大師

興起というのは、それほどめずらしくない。行基（668－749）は「聖」として、民間布教と社会事業に尽力した。

大窪寺の本尊、薬師如来は薬壺ではなく、ほら貝をもっているのは、同寺と修験との関わりを示している。

「上がり3か寺」といわれる志度寺－長尾寺－大窪寺の中で、補陀落山・志度寺は海の札所として観音浄土への「補陀落渡海」の由来をもち、山の札所の医王山・大窪寺は、本尊が薬師如来で、山岳仏教の名残をとどめている。

【三界萬靈－四国遍路のキーワード】

四国遍路のもつ4つの特徴（①浄行としての苦行②滅罪・鎮魂③自然崇拝④遊行）のうち、①、③の二つが修験道にみられる顕著な特徴である。

②滅罪・鎮魂は、四国遍路だけでなく、一般的に巡礼に欠かせない要素である。遍路道や寺の境内で、「三界萬靈」の碑を見かけるが、これは、三界の靈魂を供養し奉るという祈りの言葉である。他者の供養は、自分の滅罪につながる。

「三界萬靈」は、自然界に靈が宿るとする自然崇拝と、滅罪・鎮魂の双方を表している。

四国遍路は、その祈願を、札所を巡るという行為（遊行）によって叶えようとするものである。